世界を知る
～It know the world～

このページでは、「世界を知る」をテーマに独立行政法人国際協力機構(JICA)デスク熊本や、国際交流・協力分野で活躍している皆さんのご協力を得て、日本で生活する私たちには日常知ることができない興味深い世界の状況を紹介します。

「“海外を知る”ということ」

青年海外協力隊OG　田代　尚千恵（なちえ）さん(菊池市出身)
（2014年９月～2016年９月　ベトナム派遣　職種：言語聴覚士）

私が青年海外協力隊に興味を持ったきっかけは、長崎にある病院に３年ほど勤めたころ、「新しい世界」に憧れるようになり、ネットで見つけたのが協力隊でした。その病院のリハビリ職種には隊員経験者がいたこともあり、「私もやってみようかな」、「自分の経験と資格を海外で生かせるチャンス」と胸躍らせ飛び込みました。

私の職種である言語聴覚士は、リハビリ専門職の一つです。病気や交通事故、発達上の問題などで話す、聴く、食べる、飲み込むことに問題を抱えた方に対しリハビリを行います。日本では 1999 年に国家資格化され、現在は約 27,000 人の言語聴覚士が病院などの医療機関を中心に活躍しています。

私はベトナム最大の経済都市ホーチミン市の「チョーライ病院」で２年間活動をしていました。この病院は約 40 年前に日本の援助で建てられ、外来患者が１日 3500 人、医療教育の役割も担う国南部の中心的国立総合病院です。先輩隊員たちも理学療法や作業療法の支援を続けてきましたが、言語聴覚士の派遣は私が初めてでした。日本でも比較的新しい分野だけに、任地でも知名度や仕事内容の理解度は低く、活動では様々な困難がありました。しかし、陽気で優しい同僚たちに支えられ、困難を乗り切り、２年間の隊員生活を過ごすことができました。

そんなベトナム生活における体験で、私が皆さんに一番伝えたいことは、「“海外を知る”ということは、自身の変化に繋がる！」ということです。

少し汚い話になりますが、ベトナムの人はトイレに行った後に手を洗わない人が多く、女性の方でも平気で人前で鼻くそをほじることがあります。私はそのような行動に驚くとともに、マナーの違いをストレスに感じることがありました。しかしその反面、ベトナムには私にとって嬉しい文化がたくさんありました。その中の一つが“ごめんねコーヒー”文化です。実は、ベトナムはブラジルに次いで世界２位のコーヒー輸出国。道の至る所にカフェがあり、人々が思い思いにコーヒーを楽しむ。日本のお茶と同様、生活にとても密着した飲み物なのです。

さて、話は戻りますが、この“ごめんねコーヒー”文化とは、私が勝手に名付けた文化ですが、同僚や友人と言い合いをした時や相手に迷惑をかけた時、自分が悪かったなぁと思うと、コーヒーを添えて謝る文化がありました。相手の好きなコーヒー屋さんのコーヒーだったり、ミルクや砂糖の量などを相手の好みに調整したコーヒーを添えて謝る。相手のことを知っていなければ出来ないことですし、私はその場面を見る度に相手のことを思う気持ちが表現されているように感じました。

このような文化・マナーの違いに触れ、自身のものの見方・考え方が変わりました。そのため「“海外を知る”ということは、自身の変化に繋がる！」ということを、今回テーマとして書かせて頂きました。

今後どのように世界と関わっていくか。帰国して数ヵ月、日本文化に触れながら日々考えています。